湖月抄

別3
60
1

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

閻魔庵圖書部

末枯　并九　細巻名以言ヲ号ス

ぬるもるれそうつゆうそのそ〜らそれ秋を与うるお。細源三十七の十月より三十八の秋までのまあり。但まよ十一月よりおうへさらぐ。をそくいぐさきまふとも一つ盂四巻　墨書彼一説の巻よりへ月より并七巻の十一月よりぐのるまをとりそてさくをねよ秋のタベうぐるへぬみてをそくる一年よりそくく。并八巻の秋よりぐとりつぐ〜。赤豊乃并七。盂巻のそ〜めよむぐ〜の綴黒の宝よ加うふるまりそくく

岡本報告記

肉よそそ〜　細玉鬘の段

思のよりよ空多つそをそ〜。をそり。花多にそうく

みくそり花尚侍よ如そひくいぐぐ入内そ〜

ひるそよ〜そうるれあれぐ肉よそそめていは

ぐめもるぐぐれお。そぐ〜〜人よりに

しゃぐとそそいぐれの

しの人くいぐさめそそ〜

上下界

ぐぐ〜人よ　細源の宇七。

世界へひろ〜そ〜せとしお私のしもぐぐ〜

ぐそ〜く

彩れと　細玉鬘のそ〜

ぐ〜のそよ玉鬘のはの

のおるるまとおりてう

ちりけ給そそうし

そうそ〜ん　細玉鬘のそ〜

ひ人をり私そ〜ふに

こぐ〜れてそ〜ふび

のふも

肉よそそ〜　細玉鬘の段

思のよりよ空多つそをそ〜。をそり。花多にそうく

みくそり花尚侍よ如そひくいぐぐ入内そ〜

ひるそよ〜そうるれあれぐ肉よそそめていは

ぐめもるぐぐれお。そぐ〜〜人よりに

しゃぐとそそいぐれの

しの人くいぐさめそそ〜

上下界

ぐぐ〜人よ　細源の宇七。

世界へひろ〜そ〜せとしお私のしもぐぐ〜

ぐそ〜く

彩れと　細玉鬘のそ〜

ぐ〜のそよ玉鬘のはの

のおるるまとおりてう

ちりけ給そそうし

そうそ〜ん　細玉鬘のそ〜

ひ人をり私そ〜ふに

こぐ〜れてそ〜ふび

のふも

可畏と云とそれありとの心

肉よそそ〜ん　ともありて。ぐぐ〜

ひとよおもぬくりそぐ〜いそあそて

多人ぐ。さをそ　おなぐぐの秋

まで。いそ〜そ〜の秋

ぐく。やそびよ

いりそるさ海のそ

ろ〜のそけをそ

てそ〜と云ぐよ

それよそれ

りふ海るれ

拍よそそ〜やそ

れつぐれそ〜ん

そそ。ぐ〜ていそ

お舞玉のそ〜

あのよぐそ〜

石山の仏をも　孟 媒の弁を観音と同くたのもしく思ふとなるへし　花 浮舟思ふ君の石山乃
観音によそへてのたまふなるへし

心ぐるしげなることどもを
師 河海にもさながら
づよく心がけし人この
まし 哢 新によそへつ。
心ぐるしげなることのひ
思の事の心はへをさへ
しらすなるいのちなりとも
河海日本紀 多日 むつ
らへかけしくこのみ
とりて
こゝろあさき人のさめあそ
事のけんも 師 河海にハ紫
式のゐなかにおりて浮舟
の心ちかきるすくまの
人ゐりとハいはぬきさんと
それなりとんへと正本
とて仏神のしけのふへき
しやをいふ 細 河海に日心浅さ

細 弁が心ハ大君にゆかりあれハ物なとも思はさらん也
女君のかくのたまふも物がうとくこそにけれ
だにえまじらひてこもりゐなまほしけれそこ
弁のありさまをさしていふ　花 其様也
らむかうしげなることくもや、ありくよこ
しどけなきさめかたのさめおぼえ寺のけ
仏の験もあらはれすとなりといへる義也
んもあらはれなん。物まうでとうゐてゆかせ口
細 此もの字ハ浮舟も紫式のうへもまうて奉るへき也
そていふ也さはさよ
おほしやりつゝきこゆる　花 石山なとの
しつゝゆかしきかなのひそかにさきなと
細 実父などハゆかりもなくて
もてなしてゆるされ奉るこの
もくゆかしきさまなるにぞあるにほいのかそ
ひきさへしゆかしきゆめのかたさんとも人乃
しきえんいひつゝかしうあはれなるしまてそ
細 大君の秘所也
きゝなれなることつたへしりつゝまあり
ころなるよしなきたまふなと、いふもそ

人とハ浮舟をさしていへる義なり。それも面白し。又の義ハひけしたの宇治の中の君の方
物の事を染して添へりひしらるも。其きつしもなりしこと。皆ハ物のけのえうつ
給さすかし。今ひとたびつらうのこすを給ひ立つる心ハ浮舟を
いと浅き人のなきに利生もさもやかなすらしし。此時ハ心浅き人とハ君をさす
なり。此段ハ給ひ発句白心浅きへき弁の御すかの付けや、此人の節ふかなるをさす
が心浅きそしにし石山の利生をかしこくおもふとそ　師 思ひかけぬ心あさき人といふ
ハ哢の段也
ぶしきいとふかく　細 大君の出入の義也。心のかせとも深のふくみ浮舟とまさ
源の御謂勝也

文学ぐハ　細 内大臣の御心
よハ浮舟の事なる文体よ
つもハ大君の御事つゝさのふ
すとハこの心がゝりなる事也。

ぎまへしくかひもとのしけまる
源氏の君也
て給ひんかしこの事きかせつゝ
細 いはさ来の雲まいらせつゝ
をさなふまつさひとつのい給ふるかがいと
実ハ君かたの下心あるよにして
物きよそつけまそすとのごとくよほさ
らかなる海のへいるいつこ立
ひとのそしり恨みをもおもてなくも
内大臣也
とぞ見てこそふちいハ物しくめや
とくかりそしよう浅かなりことなるさ

外結社のみふかにて侍る
内侍所にもかたりて女官ども内侍など　元　内侍司の中に尚侍（ナイシノカミ）典侍（ナイシノスケ）掌侍（ナイシノゼウ）
女嬬　此四等の官也

式部のもとへ　細　是もむら
さきにかゝりしに、大斎院
の宰相の君へ申されけれ
ば、かくて京にて侍くかな
らん

わゝさりし物語このゆかり
を寂しく見るの衣（つゞきの）
物語へとめ（?）参り給ふ
黒のうたも

こゝろかくするを、いとしづきさうすくがんのえん（其ころの内侍の事）
はなかりしさうやなどはまいそいとじうに（抄 紫式部の事）（孟津の事）
わしとゆかりも、上衆の絡もいりうとの言（式部の父の法子之）
れ流ことをさへびとゝもに思ひけるぞく。
とりゝさるみりのゆりかしかれど、さまく申し（抄 弘徽殿の事）
う根よりて色、今いうひ為しと云ひ怨をこ丈（むらさきの文字に定りしこと）（盃 殿浪）
ねハ気よそろのかめ人のよしありけるこ（黒ハ寛和のころ定り侍る也）
ざれさのよすがなくて、まうしまつる為
すぐらくろゆきて、おもしきこし湖水よこの
まう宵あり月のくもりなうすみわたり出い
ひとも心へに詣でしまへるとおもしと人く

そのかみて細にあたりて
てい新しくかく侍るを
めてゝ、いて残せし
しさきをつくりて
よりてあかぬきの
ものかなしむの為
よ逢まふまふ、源氏を
源ハいかしくそう為
まじきとそ細しらぬ
ひまふし、奥のそふ
をおろしのなけ
ぞらんとおりて東
のの名をつるする
ものかの物がたりそ
まへ源氏によるびと
おおさんとなりき
とと
尽もかくおしう
細源氏人の類しも
今けられざるなる
いまわべきこと

ここより女へつらうにはやさきこそありてる（むかし細にかやうに）
し給ふ年性をよそへてやとひかへりとひ
むそ何しれんもりてあらぬき細へまうこと
なれど、ゆかしの物がたりんこし、京の月さくろ（細 是ハ爲に、三文）
ざ細のこゝろうつるすさけんくさう物え（源）
そうるとおもふのおそろしうれおもう
のさゆりかそよりのこゝろづくすこれ親（むかしの大将の中ノ事）
き源、麻もいとおしうぐんぐれ思ひき（源氏之）
ぞひかるすらうとへかごりつくりて紙
ころなりくしけるよなむけるこ
とかこのまゝてうしと、昔よりのくしを見
しかく紫の上にも見えうさうひとり（胡蝶の巻にて此の物語につく）

うちつけは　細　おつけるなるは源のふぐせまて　聽きまひらるを
いまさらに人のふぐせ　盃　源のふ　おのるを常
よふよりけてしひまふる。
ふのらせとなりとこどさ
らよ人のとれ源の我
るをのまふ　師　人の
ふのらせとれ好々女のうす
え源氏とはやうくうろぐ
しき好々女を左ぎ也し
まひて人のふ乃らせ見れ
ぐしとる文よ又好き心の
おこりやせんとりまてて
しきまぐしるぐ　とき

けしき　呼　ひよの結さ
いふ也まひしよにぎと
しきおくしきこ

しまるどきそし結いまさらよ人のこころ
ぐせもとそとゆぐしるぐしりのくるし
うゆぐされし時さてもりやとゆぐしより結
ひしことるれば、るを見えしをしさえじ大
ねのゆえせぬひるつきつうりまへり女ぎ
あやしうるやましけよのこりてるい結
て、すくよりなりおりもるくしかれまへる
をうくつうりまへれば、すうしゆきあぐり
まて、こまわてよたさうくれしおけす。殿も
用えことよすうしけ。しきさ海よりて
るいまひて、大かさのことどをるどこそしまふ

しくよりるるゆつひの人よるしひてい
ましていふしさるきはけとひまた結とこそ
ゆ結よこそ、しひのかりなりの重ぎころ
るく、ぐろしきふも洞ぞこぐれ、やうく
ら海やうなりは物語よりて、うきは
けうそくよりうしまて、すうしのぞ記
つ此のしきまふいとおしけよおりやを結
つるさ海の、こまりしうらうゆいとのそ
ひまへるよつけてもよそよこえるけと
あまりなりふのすさひぞうしとぐらあし
おりさちてくこいこひどことこそ、げひ
とのとしたくちぎしぎりしを、しひ乃和

よそにこえるけ　細　源
のふまり、我物よしくて
もこるぐき物をとこ
おりさちて　盃　源ふ
くこえ見ねともといふは
源のくまゆとも人の物よ
るもくきとえしぐり
しとく　細　三句源氏実

なりやとてそのくるしきおもひをなぐさめ
うしうあるそれもおろかなるうたてあ
むの
るをいかにもしてこのおもひをやすめんと
ぞのそ舟のあそびしたるんそうろはさなの
ゆきしに（踏ろうさ）なるとはた手のさまにて
そこにてんやしてとのをたゝきたちも
（細三蓬川のまき若尼ども祝あり根ごと師曠
うみはせかりあ
なるさまれぐ
ことのよふにひるさほどもむの秋
とるんこのりさとそこまふとい
るうんそうろうやとそこ

うるさことをそうりほをれて川海をこ行のうみ
ほーとこぼりほの三蓬こそれとまりてい只河
とゝゝて二弘元
うを川（孟子の尽心を按）
ほ川とあるをうけて三蓬
御川とくゝ心をかけ義あ
まるあれども只そうろく
後る奇くゝやうのうれ
出来ぐうさゝよ清谷
くゝみいをまう死後の
事ゝぐうさゝにぬ
ねさ死しいうんゝあよ
とけうこほの三蓬川ゝ成
栗川とそうり十王経
ゝくゝうり。をいほ（水深）
日本紀水尾万葉藏
ゝ地ゝみのおさゝ
細深の説ゝ非と三蓬ほ
必清うるゝ孟深説ゝ。
ゆうみ物をこ蓬をうう
ようゝゝそゝんとへおさ

うぐ海ーゝゝ
ほのさゝぐうりい（細史記）婦のゝゝひをりぐめ
ゝとそもも夫婦のゝゝひとをゝゝせゝうれ
物をそぐ計もそもをくゝほ（源氏むぐ
ぬ川を引組とゝゝ。孟深とゝ響うありふ海
ゝもうれゝ。ゝさし琴を抱て海外海をぐ
ゝうそゝほのゝさぐうり引ぐをけんとゝゝゝ
まめやうよ（細むぐゝ）をひ物ゝぬゝのぐさ
世ようさうれぐゝ（孟愚ゝ深の我をそうゝ
うれのゝそゝうう海ゝて深のこと今をひ物ふべーゝ
ゝ琴を抱てそこと作り給んねこ

（深のうゝ）
おゝてのさゝ（細深の利のゝ）
の給うすうことゝ
まうゝ海よ多ゝぐゝ
ゝ海ゝをしゝ
まゝやゝぐゝてゝ
ゝぐげうありゝ
ゝ海ゝれゝ
ゆゝ給うれぐ。二条の北ゝ
ゝうやゝくうんるぐゝ海

（細曽河よてゝ）
（細ゝ荷のうゝ孟深）
（源ゝ）
（みるを拳）

ゝびそめ（源）
人のゝゝ（細深のゝ）仕よ出ーて海よゝゝ
うくりとゝゝ（細文北ゝゝ）
二条の北ゝ
条園よ二条の北ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

あつかひこゝてん大后の
父大臣のうしろ見おはしまして
の父大臣ハ二条太政大臣の
御事なれはかりし二条太政大臣
と儀同三司兵部卿宮
なとさふらひ

うちに おほえ女御のうへ玉ひ
つるのまゝにゆゑんあるを
源氏の君のかくあるをさせ
とみれとこゝろなくてゆかり
とをくゆかりもしけれとも
あるれぬ源の君の事也

その女御のかくにおほえの事也
らうたくにおほえの事にて
源氏へまゐりおはしましても
とふらひまゐり給ふ事を
おほしたる女御のかくいれ
さいはひ
くるしひくらへやう
のゝしりあへるにゝあるへき

うけはりて給。かれは人のゆるしきこえざりし
こゝろさしあやにくなりしそかし。おほしまきるとは
いとゞわかうくるしき御心ゆかりなれど
ゆかしさ御かたちもえんなれ給ふそかし
さやうにこゝろうつろひて人へしく給ひ
こよなうおほしなくさむやうなるも
しめやかに給ましきはあはれなるわさなり
いとゞやさしくねんころにおほえおはします
そのつかへまつりて御心にさせ給ふ人の
ふつきみておもはしき御方のおもかけ
ゆかしまへらるゝおほえのみかとの
あらし給ふてぬこころよくまつりたまふ

御まゐりてうちとけたる事も
世の人ぶくとをけうち給
ふゆめにくらうる事
なりけり
とにかくわらはあそひのれ
なまてまいりつゝ
此の君の御まゐりのけはひ
にほひそゝのかしこえ
おほしらるゝらんはかなきも
つゝみのなかは
藤壺をおほひまゐらせ
八宮ともこのひのありさまおほ
すまゐゝ御ふくぬ程に
しらのつねさもひけるに
のみまかりおもぬくてつく
めぐしき人の御ゆゑに
あまひかな　細弘徽殿の女御
兵部卿の宮もそのたゝ人
あれはくせうすをもえ
せひかへし給はさり

作のみ子　御元服
のくらゐしゆくしてのちよい作いわか
しうかれもこそすまつりけれ春宮の
ひとゝせの春宮の御元服
なんてんにてありし御き式をおとさせ
給はすそれ給はしとめ
ゆるしもせすのけしきをとめ
まうとめ給ひてきこえさせ給
こゝろにまさりける人のあるゝ
をまことになりかしこへ人のゆるさぬ
らんこともはれありぬへき事を
おほしてきこしめしたる
て人のこゝろよりこさぬべきこと
女御人はおとりまさりけれと人の御

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1　　ガラス使用

めぐ一年今ハうづりの身
まで

きまりひるとは 明 小方の抱
の事に打をてしろ事
しきく
おをこうげけう 細 大将此心
なり おをこうげけるとは
おうづらのすこまふ事也
孟 六条院に おをこうげ
きてうを見まふ事也

此うりふの 細 鬢黒の小
此方まのまふ詞 一家人と
云りのハ何ものをもせひ
のどめてこそあるべき
抱をとし 師 小方の式アマ
気へまうりまりんとあり
を異人の詞へしうしき
きいとハ志うなべき人にて

づらひ給 本性 おひけ黒の中方此心をうふ いと志づうまふらくこめさま
へる人の とさ 細 抱のけと ぐこうろあやまり志て 人は
とまれぬべきことなんしうまじつを給
ける まきまひるどのあやまり志どけなくを
のくさまりしをなくやつ志く いとむれい
くりてなしまへるを おをこうげけるめうつし
まふ ひけ黒のこ ととまふねど 年比のんざしひきふ
身抱なしねバこうろ事はいと衰と志ゆて
まふ 昨日 ひけ黒の詞 ふのいとあきたるなる人の此
なりしひじよ よろしき事はよなれバこ
なきひのどむるかたありてこそみを何な
まいと身をくるしげよりてなしまへれ

いふこうろなり
身もくるしげよ 細 小の方此身をくるしげなるあまさのこハえ打いてざるとこ

世の人にも似ぬ 細 抱のけと
えり 吾海分堪悪まとべ
きことこそ
えさしもありそうましき
小方の大将を覚し深むよ
なとえ気へ後まつまへ
ぬけしことむな 細 此なの
字制禁のんよへあらじ
ことみまひけること云
うけしろ詞こ
女の此心をこざりうりし
細 女ハ是悪なきなり
世のありさ女をも此続
してざる如し 抄 抱
別女ハ是悪なきこと此
小方ハ抱のけさへそひれ
ぞりやうよのまふなり
一まうりこ定め 大将の好

ばきしやべきことも うち出きてしまへてな
ん 細 大将もあれとちひまふ
としごろ 奥きてやることよハあらじや
よのひとにもにぬ此ありさ海をこまり
たそんとこそハこうしりひ志づめつを
ぐしくうよ えさしをありたつまじき此
こうろをきてよ 覚しうとむな 此きなき
人ごとも給れバとき海かうざ海につけて
をろうにはあらじと思へしまうを女の此
心のこざりがりしきまくよかく根まうり給
一まうりこきざめ給ひぬ 程ざしをありぬべ
きことなれど まうをてこそ今志だし此

まゝ志の志ゝるぎを見定めぬ
ちぬ物ぐは恨給もむる
れどもとゝ
文のきうしめし 細 女こ
そあれ又文の同意し
まつるまゝ心ゆきさ
まことゝはなり 歪つる
師 志実は離別し給ハ
んとの武門の志ゝるぎ
給ハ又志りしうきんとて
の勘当給とゝ
いと給ごけよ 細 めぬ大
ねの云まふを小方ハ喩
喩しての給ふと思ひ給
ふ
りくの志中ね 細 りく此志
ハ大ねの小方の女房中
ねハ小方にさふる姫人
し いづ里も大ねの心人
男づうしをぶけうり
細 小の方れ 詞 我男のまゝ
づりまてハあらぐ又文
の御上をさへのまふまと
し 師 饒本 巻 日 漢語抄

らんじまてめこやのきうしめしうとこそ
さはやうまふとまうしまりてんと物ぐ
のまふるん 歪りてつとうぐ志き まのことに
物ぐし 歪つることまやあらん 志ぐしうじ 細 うんこうん
志給べきまやあらんと打まひてのこまん
る いとわらげよこころやまし 御めしうど 歪てかけりのくやう
ぐらてつうまつりるれうる りくの志中
ねのおりとるどいふんぐごよ 目どよつけ
つやまうらぐ つうしと思ゆしうを 小
方もう 歪本作し 川しごろりのし給ぐとまて いと
なつうしうおるまておまつり こぐうう 小方の詞
をぼけうり ひがくしとのまひちぐ志む

嗟 あまさう まゝ詞し
うき男のゆうりうぐし
きやうなるみくなれそ
給 御 我男のぜ人乃
やうにもあらぬうら 又
文のまゝさへ 引出
給ハうろくし 我と若
しくしふとゝ 再なれ
まてとハ我男のまゝを
いつもやうに和し先
まふに変なれられど
今ちじめうやうにも
若しくを思ひぬとゝ
まいてけうら 嗟 うこい
とうつしう 一本 まゝ
いとけうらして

なれ ことゝりなることよるん 文の御こと 歪 文の
空白 諸てと大ねの詞よつきてゝ
をさへとりまぞのまふぞ 或本の歪ゝるまゝ書きとゝ りきて給ん
んハいとゆしう 給男のゆうりうぐし
きやうなるこしなれまて給れば いまちじ 歪 歪
めくいうよも 物をしひ給しぞとて う 歪 歪
ちそむきまへるらうさげなり いとさく 御 小方のあり
さ女を此所よつり
やうなるひとの つまれ御なるやこよやをおと
ろへひまづかくかこいとけうらまてなが
うりまうが わけとりうろやうにゆら 目そ
つまくけづることもゆさくし給ひぞなこ
ぐよまろうれうるハいとゝ衣なり こ海うよ
ゆかへる所ハなくてちくえよ 給まりてな

以燧火向燒而得免 河海 日本武尊東夷を征し給ひし時駿河国の賊徒野をやきて
やうは草薙の剣にて草を外にて向火をつけ給ひしかば賊徒の焼亡してさるを
こまかなる事は別して焼亡をあらそふとかや

今はかぎり 細 まも表なり。
云つひゐすりなして見え
めでたく

宗とこの御心のうちの
しらぞ 師 かのきは
いみじ。のたまひあつかひ
ぶらめかしげなる様なれど
じんの心よ事もなれども
よしめかしき人ぞこそけれ

とかくひきこえつゝかうしるぞとされが 細 格子も夜はみなおろさず
らうらうしうゆゑゆゑしきかたは人にまさりたまへれ
あさはかなるすぢなどもてはなれ給へりける人の 盃 少方(?)
いかゞ給ひてこそもて御心をあやしくもありける
やとそこのし給ふ今は難かりしぞむかし
とさりひめがくしあてなる気色いとあはれ 細 大殿の御心 師
すりかなふは、いかでかとのあはれ 不審
なにこのころはうちつけなるのがくとし
らぐらぐしひとのそひあまし
とひがりをうつし給ふ

のたまふ
くるしのゆかり 細 御心
とてそれ給ひてなくて
心もとなきぬ事ことよ
くしかるべきを

御のあかも 細 おひつね
なくにおろかなのよは袖
の氷のとけぬさへのよ
師 伺の様あるべしよの
くて
火をとりめでて 細 少方
の火かりそめしよせて
雑思よしくさうめさす
なし

かりてゐん、ちぎるえあはれなりけるに 少将の
きはて我は来の声をとがめて むかし
めて我はしそてなんぐるしよなりし。
心やましくきこえりゐんぐしよのつるたけり
しきええんすふ時は、わりなき宿よりさころ
もうきてゐん、わりなくおもひ哀ゆかすじ 細 少将の詞也
よしへまへだ、立しまり給ても、いとゞの
わりすくんは、わりくちしとてあはれ
しそふくをおもひさまゆふ給ひ、袖の 細 面白き所ぞ
氷をとけるんりしあざやかにまつひ
ねまへつゝ、ほいとりめでて、ゆかしく 細 雪也
おめでせしてまつり給、ゆかしく
よろこぞとも、よきけしきなれば、とぞ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

としころるまひまりぬ旅
ぞこゝは　孟父家の所を
旅のごとくあらんとの
ゝし　おほ祖ハ大将の家
中をゆきて行して住まへ
るゆへし　師小方の女房
などの父家のうへ此旅
住をせずく傳しうらん
とうふんし

あんり。としごろるましひ給ひぬ旅ずまゝ。
おほ祖ハ家よあひすまゝあひ此方ハせりうへし
きはくるしくしてはいりでうあやさはさ
ふうん。かうへはとのくさしくまうでし。おぢ
細かくはしいうことし
ましせ給るんよなどさしめく。ふぐとの
がぢくるうるき物どもなどさしまこび
やつくこぐれちるべし。此でうどださるべ
きはこれもてくめをきなしすりまし。
かうしもみさはきさうはいとゆしもて
ひ也。君達はなりぢ給もなくて
ひけ黒のる息をさし
ありまゝしほふを。ちくぎみこれよ
小方へ
びとへさほひく。みづかしはくちて
孟小方の領
ろうまもくせ。いまはえをくつれば。

ゆくしえぐらゝ
暁　此須黒の此方へ行なよ
ひきべしとて。今ハ良
給し
家のおんせん　暁うらなと
へまつり給んん時のす
世母家のまび給し

さすがよしられて　ゆえハ
しめられてこひとぐめられ
てのちて。彗角此小方の
ゝしの男君達の立分

乃世りり給ゆるべきりしもあらじ。
とゝかくもさすらへるん。ゆひさことをとう
おまさちのるし
て。さすがよちりがひ給りんを給ぐものを
孟沉論
しうもあべいかれ。ひめぎんとうとも
孟桂祖の姫君のす小方の領
うなりとも。どのれよそひさまへ。ありゝゆこ
細父の此方をえさしをし
えぞ。いえさしすまうでかよひこしなりん
ひけ黒をさして
よ。ひとのふとぐめまべくもあらじ。ふしさ
ありてこそこぐらんめ。家のゆんをんれど。
おまへて
細源四官
しこのやうよまじらひをすとも。かのゆくぐ
天下のすハ此二人よく給ふべしとも
まちのれふ。ふれるまうそ。かくうろを
孟本しめられて
ぐるまうりぞと。さすがよしられてふ。ふよ
孟道年しかり
をかくんとうしうりとそ。ひとやし

まぐらさまをいひでけて俺まゐて 盃本志ゐられて青表紙ぬけたる。思案 絵本 信本 しられてし可用こ

青物語 絵古物語嫡女を又ハ今比よしひしりど維母のうしふりてをろそうよゐしまを 嘆盃同

うさのやうふらく 細 小宮の母と云飛ぐらりしてなぐらへてあらぐにやうのうち出来ぬれば行きさ祝ゆがつかるしとし 嘆 又まと云飛ぐらりしと 盃同

いそうあれ給ふん 盃元もいふくたげしくしらんとて浦近へのくさ 志きさまふるへし

よひさいりつくまじらんとし 後の世まくいそじきこしくるさ給ふ これ おゆきうさ人の物と いはひまうねどうらひそこそへるさおりさうを 青物語 なぐとうふとしのつまのんぐしふきゆやぐさ 時よう川ろひ人よ 志うへいぞろうよのこそ 如かれまし 細盃 夏説

うさのやうまてうまへふぐさよ 名物ろきこれ うろうさ 御 おれこのうちやうまハ松柵里の此男を とりてなさしとし うろうさ 可ありてもりくるい給ふ じとこれめのうぐもさしつぐひてのまひな がく 目もられ雪ふりぬべき宮の風かなも 心ゆそうこゆりゆるり いそうあれ給ふ なん さやうとれ 此人の志ぐらそくのし

ひめぎこ ハ厳いとうるしう 盃まきぐしらハ大将の一 浦雲まるれバいと夜ぐひ とりさんと思すふ

いまなども 細 姫志ハ大将の雲まさ ゆまうりくつく名 物をしひまふ

只ともまうりまるなんと 給ふて 桂枝の心 大将の玉鬘の方より 給ひまへ しと給まふ

くくれなんよまさにうぐ きまひなんや 細 日ハ雲 給れバ玉かづらのうへ こそいそぎまへかれこ るくへハ何うとし 盃 大将ハ只そ玉かづらのうさよおハ もしさて 誰よ日くれされ ばいぞうおハせんと推量さ

やうして 花 藤原のさ家と めぎこ のぐひつくるがぬ 桂枝と めぎこ ハ厳いとうるしうしたりまふな らひよ 桂枝の心 大将をつまよ 兄ぎしてハえあじとし 盃文 ぎしてでいつぐくりあらん いまな ぎしてとし あれとゆがすよ うれぶしぬしてくえまさ なまじと 桂枝の心 いとふうさ などうしらへさて 桂枝の心 ぐいまも まうり給ふなんと給ふてしまへど 菓子 くくれなんよ まさようごさ給ひるんや つね 姫志 地又ハ桂枝の心 夏説 のうち為給ふ ぬまふひむぐしゆりくのうしつを。 人よゆづるくらし給ふ 衣まて ひめぎこひ もぐこ女のうさのうさ ぬ ぐいさてうようさそ。

ひはだ色　細　ひはださ桧皮(ヒワダ)
色にそめたり。孟 桧皮色
色紙襲の御ふみ也
かんざし
今はとて　細　表向云之
是より桧皮の宿と云
師　宿かれぬともハ此宿
を離れゆくとものこゝろ
なれきつるやとて
師　姫君の歌也。母君の
をしへて給へる心を
かき給へるなりし
あれきとハ　細　柱ハ女君の
ものなり。是ハ此住給へるの
ありとも此屋どうりに
なるべきさまにて。いるさ
とし孟　木の柱ハ女君とし
て云なる柱ハとひ
いひ出ともいふなり。
そんハあるさまにてけり
あるとも我ハそのいとひ
かくやうにてなれべき
と也　宿もる君式部卿の
同し

はしらのひわれたるはざまにかうがいのさ
きしてをし入給ふ
姫君
いまはとてやどかれぬともなれきつる
まきのはしらは我をわするな
えもかきやらでなき給ふ。母君いでや
北方
とて　なれきとは思ひいづとも何により
たちとまるべきまきのはしらぞ。御前なる人
々もさま〴〵にかなしくさしも思はぬ木
草のもとさへこひしからんことゝ（まきなれて後ハ恋しからんとぞ）め
とゞめてはなすゝりあへり。もくの（北方の女中）
きみは殿の御方の人にてとまるに。中将の（少将の女中　北方に付て行）
中将
あさけれど石まの水はすみはてゝやどもる

あさけれど　細　石間の水ハ中将おもとの宿もる君にて、少将ハ北方にそひて式部卿の宮へまゐるなり。
とゞまるべき心にもあらぬなり。
孟　我も此まゝにとまりてハ
あるまじき也。所中将の身よりも
のかなしきことを云。
上の君に恋しう思れけり。
おもひもたちかたき也
こゝろのわかれをおもふ
しきりしにまかりいでん
なかれたるきざみの
へ給ふ
かたみにそこを思ひやるべく
細　文選別賦に親喬木を
於古里
宿の桧をかへりみるに
遠くゆかしきや
君がすむやどのこずゑを
拾ゆくゝもかくるゝまでも
かへり見しはや

君やかけはなるべき。思ひかけざりしことなり。（中将詞也）
かくて別れたてまつらんことよといへば（木工ハとゞまり中将ハ北方に付て行ゆへ）
木工
ともかくもいはまの水のむすぼほれかけ
とむべくも思ほえぬ世を。いでやとてうち
なく。御車ひきいでゝ見かへるも又はい（南二間にて北方にいひかけざる）
かでかは見んとはかなき心ちす。こずゑをも（引出て）
めとゞめてかくるゝまでぞかへり見給ひける（東北行）
君がすむゆゑにはあらでこゝら年へ給へる
御すみかのいかでかしのびどころなくは（細　桧の方の御方へ出まかせのうき）
あらん。宮にはまちとりいみじうおぼしたり（姫君の母上の御事）
母北の方なきさはぎて。太政おほいどのを（孟北方）

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

表むきは御かたちもさまも。ことは
御子たちの同宮也

女ゝしく給へしめて
細 男ゝしくみゆる義歟
の方さまとみゆるなるべし
まことの人は 孟 太翁
の詞也。わかき御けはひも
えならずして見つゝとはやかに
の中よりもふつゝかなるを
いと清げにのかよひたる人の
細 心づかひ寄りて、にくからぬ人
ならずゐでくらそふづき
るなはわろくなし少方
のみなど密通の事を
孟 太翁の説なれどもこゝも
のなし

ろづきみめでたけれど、こもやり給
ひで。こやうにしくなぐさむやうなれど 孟 文字よりさとりて見る義也
給よりのよからしなれば、かりくのきみこと 細 太翁の説也
いぐるそおりしきいろさきしやはひめでたき 師 桂枝の事
られありさまならさをてをかしくわんじさ 君と給へりしは 太翁の義也
まへどわろくとらずけれさしいとあへ
まゐるさそてとよの人はみなでおやまさこと 細 御けはひの事
どりはゝそくもぞこのとしびのこゝろさ 細 行給ふと念比にとゞまりて
よしなさりて給ひでもあだなるれいとぶり
まくすんひといは今まそても立とまるべく 孟 少方は御のけうれはとるもあはれなく
やはあるよう使さるうじくいひそてもろくて 末をするかな
とりてべくへとみしまへいかめのどもたまう

此腹は男子二人と桂枝の姉君とあり
かきるなき人つどひうかりてなすゝ給ひ
そ。あやしくよそへきこえつべき心ちなんする。なめし 桂枝の事也 抄 姉君の事をいふ也
とおぼさでらうたくし給へ。つらつきまみなどは
あてにもよろしきまつかしとさよしのどころ
ひつまうてずのれど。まいめんし給へるを 細 太翁の少方の事也
わくとておもうて何ようこそらのいま 孟 少方へ文字母少方のいさめなる也
ちじめくかうて給ふもかくるぞとし此ひ 身のうへを思ひはかりて
られ給ふ海常まさりても久しく数ある 御子のふるまひのしかるべし
といづくをも父みかどのかぎりなきとりま
さんぐうにひかるきみのことともそ見え 細 父母のいさめなり 御のけの事 イかくあまたのこと 草子の地也
えそ給ひめども。いさめつ給ひしうかある 細 太翁の説也
いとゆくしきさからんかしそべるわれかり侍 孟 孫子達の事也

行ふごとにいまなることのふまへ
しめくるりてふとおもわれ
細 太翁の今礼今文字をもうちそ
もあるさし、さま東うちおち
てるとし少方は文字のふべくは
あれども文のうつくしさへまる
く
のどひがくあるさ毎を
御少方のおしなるまれ本侍
まつまつくみえんとし
いとなかくあらこんちも
おほおやしうからかくし
さきなうこひのやうなかまど

承香殿のひがしおもて 細 紫宸殿の後は仁寿殿
ありその又うしろにあり承香殿
しき殿也妹所多くあり西
西のかた承香殿の西にし麗景
の妹の女御ありし所也
まりなるべし 花鳥 弘徽
のまうのぼりよはいなど
のくはしく奏して御つ
侍をもすゝめたまはしくて主
上へはからはせられしも女
房の装束をまうけ退
おもしろきことのあるまじ
やがてうらやましきことを
よしみてさり。西宮おもひ
も書く

めうようそて参り給ふ。ふたところのおとゞたち 細 源内両人也
この大将の御いきほひさへ心ことなり。宰相中将 細 夕霧也
ねんごろに心しらひきこえ給ふ。せうとの君たち 細 柏木なども
もかゝるおりにとあつまりついせうしより
てかしづき給ふさまいとめでたし。承香殿の せうきやうでん 細 当代の女御達也
ひんがし面に御局したり。西に宮の女御 式の女御也
はおはしける。めだうばかりのへだてなるに
御心のうちははるかにへだゝりけんかし。御かた
〴〵いづれとなくいどみかはし給ひて内わたり
心にくゝおかしきころほひなり。ことに
みだりがはしき更衣たちあまたもさぶ
らひ給はず。中宮弘徽殿の女御この宮

御心の内は 細 おりからしとは式部卿の女御と尚侍との御つぼね近くてあれば
いかなるものにやと中らひもまたなげかしくおもはれけん
こと心みえずありけりとさ
まことなき人のみやつかへる也 細 当代は更衣などもすくなし
中宮弘徽殿 細 中宮は秋好弘徽殿は内大臣のむすめ此女御は式部卿の御むすめ
め。麗景殿の女は住吉女御也
左の大殿 細 源氏の当代の時
まうの左大臣は紀伊の守の時
の御むすめのうへにや
中納言宰相の御むすめ
仰せしもまたしかりける
ひとりもおもはしからぬを此内に
つきんとてかゝりしさまをる
わびるすゞしげに見へるにあれ
をかし
春宮の女御 細 朱雀院に
の女御。髭黒の妹春宮
の御母也
春宮の 細 春宮ハ今上
いまだおさなくおはしませ
ども母女御ハはなやかにおは
のけはひし。異説

の女御左の大殿の女御などさぶらひ給ふ。さ 細 此女御は承香殿也
ては中納言宰相のむすめ二人ばかりぞ 細 此外に女御二人載せて
さぶらひ給ひける。たうかはかた〴〵に里人 おとゞの里に
まゐりさまことにけににぎはゝしき見物なれ 役の女房も装束など紀人をまうけてまゐらする
ばたれ〳〵もきよらをつくしてそでぐちの
のかさなりこちたくめでたくとゝのへ給ふ。春宮の女御 承香殿のこと
もいとはなやかにもてなし給ひて宮はまだ 春宮の御母
わかくおはしませどすべていといまめかし 西宮上也
し。御前中宮の御かた朱雀院とにまゐりて 秋好 踏歌のめぐり

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

きさいの宮の御方の雪見

我かうれと　三ぬるの
ふる　師説をおもひ
とくおもひ　貞文うたがやう
よ女のうちうんよおろう
物て我なれとかりふこと
るうや
ほんぐうの御　師　多事をゆ
るされ給ふとそ　西宮
侍も出入毎よ琴事を修せ
さうそ　西宮記を引こゝに
海よあり
こひしきちうこと海のり
細　近清の文句をおもひ出て西宮
書ざ御こ血を染ふふ
抱て天よのれちうれ
ろうの時はひうこと
九条に　細　品を退出あり
てはをとうひふ
ぐこと　細　ふ
ふとうし我で此をとう
こ一夜ねこうり
句ひべうろ人も多
そこふうこ
師ふあのんをひやう
ひふうこそうり
とつこそいまをみ
いそでうへぐさく　細今
ぬまいいうろ候こそ
うこしまべこそこそ
しめをこ
うぐうい　おうこの奇こ
香つうこさとうよ
れそうひそこ
ふし　師下の白昼下れ
うこ
ひてはうこれも　血あそ
ふ一書同あうべうこ
ちぐれとあうてて俄う
うやまうこととうてて
おうこをまよあの亭

よあこそうこ
うこうあうこ海よのこそひ幸てたう
けるの　膳し
ふこと　孟山の辱うつ
もとうこぐけるう我はまれとやみの
もとうそ　細内給のうこ退出
ておえ　細深内大臣のこ
なこのれうこ
をいてひむつこうをそひさうぐうふま
で　孟山の阿ぬまで幸還事うこと
ぐえうこ　細
こちうこさゆうこそむつこそんとみくま
句ひとをうこ
九重よ　高陽殿
自ひぐとや　孟紫宸ノ殿判ニ
れとうり　此数代ハ三ヶ度ニ成ル
れあうこ海けそひとをうこ我はかこ

こそやうこそびくまのりてなえんかぐの
まうり　音をそくより
ふとうこ
ふこの此ますれつみ
ふとうし我で此をとう
こ一夜ねこうり
句ひべうろ人も多
そこふうこ
師ふあのんをひやう
ひふうこそうり
とつこそいまをみ
いそでうへぐさく　細今
ぬまいいうろ候こそ
うこしまべこそこそ
しめをこ
うぐうい　おうこの奇こ
香つうこさとうよ
れそうひそこ
ふし　師下の白昼下れ
うこ
ひてはうこれも　血あそ
ふ一書同あうべうこ
ちぐれとあうてて俄う
うやまうこととうてて
おうこをまよあの亭

やうこそ　師　一夜ハ主上ヨリ
ひとふこ　三ぬるの句
しうこそ　細
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
しうこそ　三ぬるの句
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
ふうこそ　師　一夜ハ主上ヨリ
ひとふこ　三ぬるの句
しうこそ　細
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
しうこそ　三ぬるの句
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
ふうこそ　師　一夜ハ主上ヨリ
ひとふこ　三ぬるの句
しうこそ　細
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
しうこそ　三ぬるの句
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
ふうこそ　師　一夜ハ主上ヨリ
ひとふこ　三ぬるの句
しうこそ　細
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ
しうこそ　三ぬるの句
ひとふこ
うぐうい　おうこの奇こ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

みかのもとん　細ふうさく叢さ
ほくこし河海よみそしもり
ふ色もたく皆河のへも
師説の寄よ真人とい
ふよ思やとあれバぞ
ふきのぞてハあらんとも
ところもハ吉名よ辭
あとつくる綱のやうし
さるにてハいふぞうとの
もしし見碎葉抄　万葉に
ハこゝにと云心にえてたり

しかし御氣色どころつきゝすとひそ
えしるしはこの人ゆゑとおもふせ給ひぬて　細え〳〵と
きかれバ仏ひとつよ物がたりつゞけれどもこゝ　孟内挨拶とえん知るとし
いかのさしさをかりいかかりかくくそうん　孟太子実弟え知るとし
とはまうしえたてゝ世ひゝかゞ仏人まで　むつかの世人乃
こゆかもさぐりたれどもかなつるすくやれ　えうすと
とそうきさよふ
ものがすら彩の索は神ぬれてこなく
人ときのぞさうりや。わどゐかつかいげよこ　文の頭し
しるうつれにもをまつらう給ひたりある　班　細　致し河　恭　尚書　礼　日本紀
しいやしうしくらうまへりひまひろ　源の殿のへの頭りし
かをとやゝ　細　孔の案しあつ忘よれバ面白き句と
なそぐむかのとりつぐやうよねがさるとと人

猶なりてかいけむことをあらつれく
かたとハ勝るゝりしと
昔の人の云　細　勝月乗
かり。今世のてもとひあ
まつし。勝月乗も同じ
のうごゑにしても同じに
前世いくつとし
きしあくかり　細　其外よ
あつかるれハ是ハ謙か
ささと云り
今ハ琴よる　細　自今以後
と仰ケよりうを記る
ことし
むかハるうけそ　同　ぎしと
くるもさへさらかへるの

猶なりてかはれくも　師考よてとかうと弁の何よえこえてうこと
をとハさてあるべしとつれなくかりそうす
まへどもあよそ川らしてかの昔かりんけゐ　孟　源のへに
と。朱雀院の后のきさきよとりこゑ絡し　孟　后と
かりなどねがしいづれどもさしあそりたること　むかのゝと
あれハまや。られいよりてそあれそれがなかぞをと
いつくし人ぐゑのりやすうまくしさわざかり　孟　源の人よ云ひやうみふかるとし
かりいまはあつけてりんとももうつろう
ましおぎる云の手かやとさまりに　孟　色とおと　細　云ひさすてし
あそけくりさすしてかりしうひとさ　孟　むかの琴引きかへしを　相琴也
あうしまひしつまもとく云ひられ九ふあつ　源の云ひると
まのおもふ人をすぐしきて御簾いあそらんそ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

そのやおもはまねかり
そのひもそのわやちねり
つきそや　風俗上野有
細　ほうけうとき出しされ
審こゝろあるべしといは只を
引きられてとみゆるなり
遂へきんと含めるなり象ど
後漢杜詩傳ニ将帥
和睦士卒鳧藻　注言
觀悦如ニ鳧戯ニ水藻一
とよめばかろくきり
或おもふ説ても漢書よ
鳧藻觀悦をはやうま
引別ちりとも鬼と玉
藻とのやうよちぎりか
はさんとく
わうしられひき
細　言ててひのそもそ云ふ
さきもこかわうとられ
ひきいわし故を遊出の
すくさ云一縁へさるしるく

とうひすさひのかをとしゐ今　こ人はこゝをさ
おむのうびさまもあそぶべきをとある
らばあかれをくずすきしさはさ侍るりう
帝みこ
らかもけのりはいしんなしれくうらわりさ
海なされうらよゐけまそおうをしられひさ
いまつすぐさどとあくけおもかふらくしるんど
いらしくさまわりてまんあずわさをのひなる
お帝よりおかうへの文さし
上わうくしのびくみおりくりさりさまうさ
梅よ云ひ去てそのひくぐやうのとそさひへどと
をおいりて[illegible]られいでろとけう
いくへもう言し[illegible]のさりさのおわりぐこう
[illegible]れんをまてとうくぐようけてとひ
しまかくれしそ[illegible]れさりなる三月
細　源し明　源の
孟やしひとて旗

冬よ衣と　細　河海よひけ
肉云佑の奇おけり文緒吉
今よ只ゝともこふともい
とぶ山吹のきに衣と源
てくもさめ説今不知ける
下総のおかうそば山吹よ
ひしうりしくし河云佑曰
すのきよ衣をそめしよ
をいもでんくよ梅をこもそ
ありうとにみでの中右
孟源云こうのみよへざう
るともうしおおかうつうく
織よへうらんとハ去つき

よまりて云楽殿の出家の嶺やまぶりさのお
りうかさ冬でんへよまきまふよつけてもえくう
と云出うと
くひありてぬきまへつきしけら海のくま場かし
出でうれば云の柱まへかざししもそくこうる
細　魚の新へ浪りまこ
しうはまくうりてけらんどられ行のまとう
細　山吹の黄面白し
わぢうとおうしさうこうひうさいうひいと面白
しかるよ衣とるすどのくせまひく
源
忘ちずずよやぞのるうあへぶろうしつる
でそうふうやまぶうさの紀がおしまえてつな
どのまふもさく人るしうくさうみすうよりく
墨よ比
ちうまれまろうしへばびぞ言えしあろけよ
くえよ文さ付いさうもあくてよめくも
あやしくされうろのすさひ如夜かりのく
細　もの云へ
師へやも
河　勝子西宮記

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

わひしらひすかしく男
君がらの給ふかし
男童樣福よ須ますらせ

あやしう思ふ女よ。お男又八
帝崩ず源氏も云れ
ど共に女まいりの事
大中臣氏落福るがもうす
しそられ。おぼつかなく
物とやそ
其年の十一月よ　細　男子誕
生す。是八十一月の末
かれどもとひ出でとく
しはらく秋より少し
愚案ふの一説の如しく
程おとゝよもりせり
けふとしづきすよ　細　おぼ
ら公成ぬ居の義しづき給

よふれておくりてすろしとなむらくゝ
すつしうかんし給。あけられおりしもこと
とこのまそりのし給るどいひよらやほし
うらやましくもやとこそおもふみちか女
らうたらんとるげさ給。おやかうむくす女
よつけつく人ものとそそちすうんの哀より
ぞおいしはうを年の十一月よりそもしれ
ちどとえいできいづくきつれいなるもおや
うはめでうしとりそしづきまふと浪が
しその頃とのま給いいうそひともおひやり
つべきとしぞうしちくやうどもとのづゝきし
かやうかうけれもくとしめがらうけざらし

小弘徽殿までにもとく
て給ひはざしまり

文帖よそひあつて　細　今男
みをも給へるふかと文仕
うつくしばえとしもまうけ
あみべき也とそく

北やけくしへ　細　内侍の事
まてそ識をぐ里子ぞ
し給ひて
まりう給てるるぞ　細　内侍
のえいうろのしずうしもいえ
中にうつくいさうるさも
あるせそく

しづごころなくおもほしわたるにすびとさ
たり給ひて頭中将とこの人まなまそいとあ
つしきとくうしりてしろびやかし給ひ
そちすなり氣色しるまじうて文つかへよ
ひありてけりのし給ふ物かしこのけしき
そのかくすまつけても今すぐにこゝさ
らかなせぬけしきをせりふつよめい
がくあるましとおもりことどもその給
ふかやけしくいとつゝさ夜よそうまひる
どしつく氣分給てやすぐくてやうさ
ぬぐらかきとありぬくさるらし
ましやうのしられはかいなのけしきとめ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

さうりのくらせ
さやうにおこが爲しき
人のらせなれば奴女め
しきとき

今はなまじらひて 仲 不出
の出るまで人中に出
まじらひそと内府の割
しまふと 孟 近江表内
府の割しまふをもき
ゐる

秋の夕ひさしからぬに
通東 諸抄に此書は源氏
卅八冪十一月までのまゝ
ここに秋の夕といひ出さ

の内侍のうへのぞうし忌も、さうりのくらを
なれば、女めしうさ海よふんさへそひて、
内大臣のこ
りてまづらひ給、女御もつゐにあるもく
孟こきぞんこ
しきこと、この忌ぞひき出んと、とゝもと
を口忌といふ
れば、御むつかしまへど、此とゞの今はなまに
じらひそと、せいしのまふとぞに嘆いれ
ど、まじらひ出くりのしまふ、いかなり
おりにかあり、殿上人おもしさゆかしこと
内裏まで弘徽殿の御方に
なかうぎり、この女御の御方に集りて、地の
ねなどしらべ、なつしきほどのひやうし
うちくちへてあそぶ、秋の夕忌ぞなるぬ
細夕雪に
に、宰相中将をよりかけして、例なしとぞ

ハ近江の忌乃なすとのち
にしひ出さうきさり
ゑ、彼一説の義に志さ
がつて、彼十二月ハ源氏卅
七冪のなすまゝに此秋の夕
と出出さうまで又一年
をしてゝ、源氏卅八冪乃
秋と見るべし

地さつふ 孟 夕雪へ近江忌
へしてゝかけられたるに
地さつふ 弁よるべ波後とハ
雲ゐの殿のなすいまぞを
思ひなすけれ祝兄弟な

されて抱るどのうちふを、人ぞめづらしがり
夕雪をかけて
て、秋人ようことにまりしめづらに、このあふ
孟そも人のを
へよりて
この忌、人くのなり秋をしなて出ゐるまふ、
弘徽殿御方にこの人を笑ひとしふさ事を
あれはしそやこれなぞとひきいるれど、いと
忌を引いれんとしろ人をかくしてもまゐられば、よづら
さがれば、よりしてもまゐられば、よづら
細無奥に
らしくて、おぶるきことやの給ひ出んと
つきしろふ
つきかたすに、このよりめるれぬまめ人を
細夕雪に
しも、これぞなくとめぞしさしめさは
孟夕雪をさして近江忌御
ぐこしいしきるし、人ぞいとくるしとしふ
を口し
ゑ、こしいしさしやうにて
を口忌
地さつふ 孟 夕雪へ波後よりぞ そうぞさ御
さしよりしんとまりをしへよ、しるしをぶゐ

本別
3-1

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用